

## シャワーズ賞（優秀賞）

### うちの川

徳島県 神山町神山中学校 三年 中南 仁

ぼくは毎年、家のそばを流れる川で泳ぐのを楽しみにしている。部活動で汗をかいた後、つめたく透き通った川にとびこみ、リフレッシュすることがたまらなく好きだ。自分にとつてきれいな川の水は小さいころから身近なものであり、あたりまえのものであった。

しかし、その水があたりまえのことでないことをぼくはコマージュで知った。世界には水が簡単に手に入らなかったり、せつかく手に入れても汚染されていたりするらしい。水道をひねればきれいな水が出てくることはあたりまえでないことに驚いた。

ぼくが住む神山町の山の川は清流と呼ばれ普段はおだやかで美しいが、ひとたび大雨が降ると突然水量が増え、茶色くにごった濁流へと姿を変える。その流れは山地の土砂災害や、下流の浸水被害をまねくこともある。一方、神山町には上水道の設備がなく山水を使って生活している人もたくさんいると聞く。その人たちにとつては、雨が降らないと生活に不便をきたすこととなる。つまり、山の水、川の水は多すぎても少なすぎてもいけないということだ。

近ごろ、「山に保水力がなくなった」という話を聞くことがある。山が水をキープしておく力がなくなったため、洪水や渇水など極端な状態が増えて、ちよūdよい状態を保つことができなくなっているらしい。それはなぜか。ぼくはそれについて調べてみることにした。インターネットや町の広報誌などからは、山の保水力には、そこに植えられている樹種が深く関わっていると知った。そこで行政は、管理されていない山の境を明らかにし、行政に譲渡し、行政が管理していくという「森林境界明確化事業」を行っているということを知った。また、山に生えている針葉樹をすべて切りたおし、かわりに広葉樹を植えるという「樹種転換」を行っているということも知った。下級生や弟たちが、山に広葉樹の苗を植えに行ったことも、その一環らしい。なぜ、針葉樹のかわりに広葉

樹を植えるのか。ぼくはそう考えたとき以前祖父から聞いた話を思い出した。祖父が子どものころの鮎喰川は今よりもはるかに水量が多かったそう。上流の地域で切りたおした木材でいかだを組み、それに乗って下流の徳島市まで木材を運ぶ「いかだ流し」が行われており、下流域まで途切れることなく水量が豊富だった。しかし今の鮎喰川を見るとどこでどこで川の水が途切れ、河床がむき出しになっており、いかだを流していたことなど想像もできない。そうやってしまった原因の一つは、この数十年で山に針葉樹が増えすぎたことであるらしい。昔の人が財産区で植えた杉やひのきが管理されず野放しにされており、それらの木々が雨水を大量にすい上げるため、川の水が少なくなってしまうそう。町が行っている「樹種転換」が山をもとの姿にもどすための取り組みであり、それが鮎喰川をもとの姿にもどすことにつながるということを知った。

このように水を美しく豊かに保つためには、山を整備することが大切だ。山間部に住むぼくたちが山のためにできることを考え行動することは、ぼくたちが水の恵みをいつまでも受けつづけるために必要なことであるということを実感した。ぼくは、これからも山の植林活動や清掃活動などに積極的に参加し、神山の美しい自然を守っていくための取り組みをつづけていこうと思う。

最初に述べたようにぼくは家のそばを流れる川を「うちの川」と呼び、四季折々のうつろいを楽しみにしている。特に夏の暑い日にキンキンにひえて透き通った水にもぐることを毎年楽しみにしている。自分の子どもたちにもこの「うちの川」を残し、大切に受け継いでほしいと思っている。